広島大学附属福山中・高等学校
中等教育研究紀要　第35巻

学習意欲を高める古典教育

――古典旅行(明日香の旅)の場合――

落　　健一・金子　直樹・金本　宣保・竹盛　浩二
仲田　輝康・信木　信一・藤原　敏夫・松浦　弘幹

1994年３月22・23日に実施した、国語科行事である古典旅行－明日香の旅－の報告である。教室で学んだ『万葉集』を現地で味わうことで、万葉人の心に近づき、触れることをねらいとしている。それが今後の古典学習をより楽しく、身近なものとすることになるであろうと考えている。

１．はじめに

本校では1974年以来、古典旅行を実施している。近年は高校一年生の希望者を対象に三月に奈良県明日香村を訪れている。教室で学んだ『万葉集』の歌が詠まれた現地に立つことは、その歌に込められた時代のエネルギー、悲哀というものをより深く味わい、万葉人の心に近づくことを可能にしてくれるであろう。またその体験によって、生徒が古典学習をより身近なものに感じれれば、と思う。

２．古典旅行の概要

①　日　時　　1994年３月22日(火)・23日(水)　１泊２日

②　場　所　　奈良県橿原市、高市郡明日香村

③　参加者　　高校１年生希望者42名(男子22名、女子20名)　引率教官３名

④　日　程

3月22日(火)

福山 ―新幹線― 京都 ―近鉄特急― 橿原神宮前－(レンタサイクル)→
8:53　10:33　10:45　11:34

甘樫丘(小墾田、明日香川、豊浦寺跡、雷丘、大和三山)→飛鳥浄御原宮跡→

藤原宮跡(香具山)→磐余池(二上山)→宿舎
17:00

3月23日(水)

宿舎－(レンタサイクル)→大原(鎌足誕生地、藤原夫人墓)→
8:30

飛鳥寺→真神原→飛鳥板蓋宮跡→石舞台→川原寺、橘寺→甘樫丘→

橿原神宮前 ―近鉄特急― 京都 ―新幹線― 福山
13:57　14:48　15:34　17:28

※実際は天候不順のため、１日目で大半の場所を巡った。

3．事前学習

①全クラス対象の『万葉集』の授業　（2時間）

②参加者による事前学習(1)　（2時間）

全参加者対象の、指導者による「万葉の時代」の学習

③参加者による事前学習(2)　（2時間）

参加者が各々好きな和歌を選び、それぞれの和歌に関する資料を作成、発表。

事前学習では、まず指導者が大和時代を中心に、歴史の流れの授業をした。その後、生徒が二人一組で和歌を分担して資料を作成し、全体で発表した。現地でよりその歌を感じることができるために、また、現地で机上の学習での鑑賞を超えるために、一つの和歌にこだわらせた。

学習した和歌は以下の通りである。（数字は『万葉集』歌番号）

・甘樫丘…51　・大和三山…2、13、14、28、1812、3788、3789、3790　・雷丘…235

・二上山…165　・飛鳥川…325、3214、3266、3267　・豊浦寺…1557　・藤原宮…52、53

・磐余池…416　・小原…103、104　・浄御原宮…4260、4261　・飛鳥寺…992

・真神の原…3268、3269　・橘寺…3822　・川原寺…3849、3850

4．現地学習

現地では、それぞれの和歌を担当したグループがその場所で説明し、指導者が補足をした。

第一日目については旅館到着後、第二日目については休暇明けまでに、それぞれ見学した中から最も印象に残った場所についての感想文をまとめさせた。(A)～(S)は生徒の文章である。

《甘樫丘》

◇「たわやめの　袖吹きかへす明日香風　みやこを遠み　いたづらに吹く」

(A) 今日一番印象に残った場所は、甘樫丘にのぼる途中に見つけた志貴皇子の歌の碑です。「采女～」の字がパッと目に入ってきた一瞬、胸が高鳴りました。この地へ来る前にこの歌について調べていた時、ちょうどこの碑の写真があったのです。その碑があった辺りで万葉人、志貴皇子は「明日香風」を体にうけ、藤原宮へうつってしまった後明日香を思い、この歌をよんだのだなあと思うと胸に迫るものがありました。石碑もただ見るだけでは物足りなかったので、思わず字を指でなぞったりしてしまいましたが、あの場所で木のすき間から見た飛鳥の地の景色は、強く鮮明に記憶に残り、忘れることができないものとなりました。

《雷丘》

◇「みもろの　神奈備山に　五百枝さし　しじに生ひたる　つがの木の　いや継ぎ継ぎに　玉葛　絶ゆることなく　ありつつも　やまず通はむ　明日香の　古き都は　山高み　川とほしろし　春の日は　山し見ほがし　秋の夜は　川しさやけし　朝雲に　鶴は乱れ　夕霧に　かはづはさはぐ　見るごとに　音のみし泣かゆ　古思へば」

（B）この歌は山部赤人が雷丘に登って明日香川を遠望してつくった歌らしい。雷丘は集落に浮かぶ島みたいで少し不自然に思えたが、見つけやすくてよかった。その麓を流れる明日香川は、昔もっと雄大だったようだ。川も年老えてしまうものか。もし、山部赤人が今の明日香村を見たならば、やはり泣けるだろうか。

《飛鳥川》

◇「今行きて　聞くものにもが　明日香川　春雨降りて　激つ瀬の音を」

（C）明日香川というのは、歌につかわれている「激つ瀬の音を」「速き瀬に」「行く瀬を速み」など、万葉人にとっては、激しく、明日香を語るには、はずすことのできない大事な川のように書かれているが、現代人の僕が見た第一印象は、どこにでもあり、また決してきれいだと言えない、おだやかな川で、最初はがっくりきた。でもいろいろと見て廻り、この地方で詠まれた歌を考えていくにつれて、そこには僕らと違う「地理的感覚」があるのだと気づいた。ここらあたりで詠まれた歌で、一番重視されているのは、土地名であるように思えるのである。資料の歌のほとんどに場所を表す語がある。明日香川も「共寝の床で男の浮気を責めた睦言」の歌で用いられている。昔の人々にとって、明日香川がどんなに大切なものであったのか少し分かった気になった。

◇「明日香川　水行き増さり　いや日異に　恋の増さらば　ありかつましじ」

（D）川といって私がまず想像するのは、身近な例でいうと「芦田川」のような広大で悠々と流れるような川であるが、もし飛鳥川がそのような川であったら、私はきっとがっかりしただろう。というのは、この物寂しく落ち着いた雰囲気がどことなく漂う飛鳥の地において、大きな川というのはあまりにも似合わないからだ。このような土地には、やはり飛鳥川のような静かな川がよく似合う。

飛鳥川を対象に詠まれた歌をみてまず気づくことは、恋愛感情を歌にしたものが非常に多く、また作者名が記されていないということだろう。この飛鳥の地の、名所でも何でもない飛鳥川を中心に定住した無名の人々が、朝夕見慣れた親しい里川に対して、日常心情表現で詠ったということがよくわかる。そしてその歌を味わう私達が、素直にその歌に入っていけるのも、これらの歌が、日常の何げない思いを率直に言い表しているからだろうと思う。

《浄御原宮跡》

◇「大君は　神にしませば　赤駒の　腹這ふ田居を　都と成しつ」

（E）実際に浄御原宮跡と言われている場所に行ってみると、田んぼだけが広がっていて、本当に跡形もなかった。この様子がちょうど浄御原宮ができる前の状態だと考えるといい、というようなことを先生が言われたので、改めてそのように考えてみると、やはりこの状態から都を作り上げたというのはすごいなあ、と思った。だからこそ、このような歌が生まれてくるのだと実感した。

《藤原宮跡》

◇「やすみしし　わご大君　高照らす　日の皇子　あらたへの　藤井が原に　大御門　始めたまひて　埴安の　堤の上に　あり立たし　見したまへば　大和の　青香具山は　日の経の　大き御門に　春山と　しみさび立てり　畝傍の　この瑞山は　日の緯の　大き御門に　瑞山と　山さびいます　耳梨の　青菅山は　背面の　大きい御門に　よろしなへ　神さび立てり　名ぐはしき　吉野の山は　影面の　大き御門ゆ　雲居にそ　遠くありける　高知るや　天の御影　天知るや　日の御影の　水こそば　常にあらめ　御井の清水」

（F）藤原の宮は、自分でも調べていたので、とても楽しみにしていた。他の場所同様、一見何の変哲もないところだった。しかし、千何百年か前には持統天皇がいて、柿本人麻呂がいて、大宮があったのだと思うと、不思議な気がする。実際、あの何分間か、私は持統天皇たちと、時をへだてても、場所を共有していたのだ。見渡すと、耳成山があり、畝傍山があった。電柱も近代的な民家もないところ、ここには御殿があった。そう思うと、心がすうっと透明になる。藤原宮の御井の歌の景色がぴったりとあてはまる。神秘的だ。

今でこそ、たいしたことのない距離だが、浄御原からの遷都は、浄御原に慣れ親しんできた者にとっては胸つぶれる思いだったのだろう。それを、なぜ持統天皇はあえて行ったのか。そしてまた藤原宮から都をうつすときも、藤原宮に心を残す者もたくさんいたであろう。生まれ育った狭い土地を心から愛し、その気持ちを歌にした万葉人に、とても温かいものを感じた。

《磐余池》

◇「ももづたふ　磐余の池に　鳴く鴨を　今日のみ見てや　雲隠りなむ」

（G）才能も人望も草壁皇子より高かったが故に処刑された大津皇子。もしかしたら磐余の池は、彼の涙かもしれません。この時代は親、兄弟で権力を争い、血筋でさえ心安らぐことのなかった大津皇子が、今際の際まであの親子を憎んでいたと思うと、今にも池が氾濫してきそうでした。きっと二上山も、寂しげな、暗いところなんだろうと思いました。そういう哀しい思いが込められているのなら。

《二上山》

◇「現世の　人なる我や　明日よりは　二上山を　弟と我が見む」

（H）どんなに弟のことを恋いしのんでいても、この世の人である私は、これから先の日々を生きていかなければいけない、そんな大伯皇女の悲しみが詠われていると思います。弟である大津皇子にどんなに会いたいと願っても、それはもう決してかなわぬ願い。それならば弟が埋葬されているこの世の二上山を弟として眺めるだろうか、というところに今を生きている人間と、死んでしまった人間とのへだたりの深さ、この世の人の大伯皇女の悲しみの深さがあるのだと、遠く二上山を望みながら考えました。

《大和三山》

◇「香具山は　畝傍ををしと　耳梨と　相争ひき　神代より　かくにあるらし　古も然にあれこそうつせみも　妻を　争ふらしき」

（I）自転車でどこを廻っても、ほとんどの場所でこの大和三山を見ることができた。いつも大和三山に見守られているような感じがして、とても親しみを覚え、場所を移動する度に、山がどこにあるか自然と探すようになっていた。

（K）僕は大和三山について調べたのであるが、藤原宮跡は三山を結んだ三角形の中心のような位置にあり、感動した。事前に調べた通りの山の形であったので、だれにも教えられずに、三山をそれぞれ特定できた。何とも喜ばしいことだ。この位置関係であるなら、三山が歌の題材とあるのは日常であったろう。全く個人的偏見であるが、香具山の形は、民家に邪魔されてということもあろうが、あまり美しくないと思った。やはり、なんらかの理由で山の形が変形したのでは。自分は、存在感は主張しないが、そこに確かにある耳成山が好きだ。畝傍山は形がよすぎて気取っている。

《香具山》

◇「ひさかたの　天の香具山　この夕べ　霞たなびく　春たつらしも」

（J）正直な所、こんなただの山に思いを寄せるなんて、昔の人はよくわからないと思っていましたが、何百年も前の日本人がこれと同じ山を、僕の立っている場所から眺めたのだと考えると、なんだか胸が熱くなります。特に香具山は、とにかくどこへ行っても目立ち、印象深かったです。この歌に僕がひかれた理由は、自分の見た香具山が、まさにこのイメージだったからです。

◇「春過ぎて　夏来るらし　白たへの　衣干したり　天の香具山」

（K）藤原宮からみた香具山は、はじめは、後ろには大きな山々がそびえ立ち、背後から攻めたてられてちぢこまっているような山が何故聖なる山なのか少しわかりませんでした。しかしもしかしたら当時の人々の感覚でいう山というのが、平地にこんもりと盛り上がったもののことだったのかもしれません。（中略）この歌を藤原宮跡でそっと呟くと、結構近くにみえる香具山の木々の間に白いものがちらりとはためいて応えてくれたような気がしました。

《飛鳥寺》

（L）飛鳥寺の裏、入鹿の首塚から、甘樫丘を眺めた。さっきとは全く逆の風景である。当時、蘇我氏と中大兄皇子とは、このようにして互いに睨み合っていたのだろうか。しかし、距離で見ると、意外なほどに近いような気がした。飛鳥寺の大仏は右から見ればその表情は厳しく、左から見れば穏やかである。何故、どうやって、このようなものをつくったのだろう。それは技術とかでなくて、心だと思った。今よりもずっと理解しがたい神秘的なことが多かったであろう時代、人々はそれを無理に解明しようとせず、神秘のままで受け入れる心をもっていたのだと思う。自然にそのまま従っていく心、ではないかと思う。

《真神原》

◇「三諸の　神奈備山ゆ　との曇り　雨は降り来ぬ　天霧らひ　風さへ吹きぬ　大口の　真神の原ゆ　思ひつつ　帰りにし人　家に至りきや」

（M）真神原は今、雨が降り始め、霧もあって風も吹いている。その中を作者は一人、惜しみながら家に帰っていった親しい人を心配し、思いを寄せている。僕には、空が灰色で少し暗くて周りがずっと田畑で向こうに山々、という中を通り過ぎた時の、ゆったりぼんやりした中にも寂しさのある心持ちが、強く残っている。灰色の真神原に一人いて、少し寂しいが、親しい人が明かりのある家庭に着いたことを思うと、何となくほっとする。そんな気持ちだったことを感じる。広くて灰色の、少し温かい真神原が、昔の人の思いと一緒に残った気がする。

《大原の里》

◇「我が里に　大雪降れり　大原の　古りにし里に　降らまくは後」

◇「我が国の　おかみに言ひて　降らしめし　雪のくだけし　そこに散りけむ」

（N）自分が担当したとかいうこともあるけど、あの雰囲気がいいと思った。でも夫人ともあろう人が本当にあんなところに住んだのはなぜだろう。調べておけばよかった。自分の担当なのに。大原と浄御原とは自分で言ってみると予想よりはるかに近くて、こんな近くなのに「ずっと後に降る」なんてよく言ったものだ。今も昔もユーモアの感覚は変わらないで、今に通じるものがあるんだな、と思った。こうした、『万葉集』の素直な表現による素直な心が表れた歌風は好みだな。暇があったらもう少し読んでみたい。僕も大原の里みたいな所に住んでみたいと、ほんのちょっとだけ思いました。

（O）大原は本当に何もなくて静かな場所で、当時のままの姿で時間だけが過ぎてしまったようでした。私達の普段の生活には絶え間なく音が耳に入ってきますが、ここでの生活は雪のシンシンと降る音が聞こえるほど静かで寂しい生活だったのだろうと思います。そんな生活の中で天武天皇の訪れは、浄御原宮の華やかさを伴った明るいものだったのだろうなあと感じました。大原の里でのもの寂しい生活にもかかわらず、この歌からはそんな生活からくる暗さとかわびしさは感じられないと思います。

《板蓋宮跡》

（P）蘇我入鹿の殺された板蓋宮へ行きました。小学校の歴史を習い始めた頃に覚えた「大化の改新」。その始まりを予告するこの場所といい、前の甘樫丘といい、このせまい範囲に、本当に歴史の跡というものが、しっかりと残されているのだなと感じました。

《橘寺》

（Q）一体に二つの表情を持ち合わせているといえば、橘寺の二面石もそうでした。人の心の善悪を表しているというこの石像もまた、長い間この地での移り変わりを見つめつづけてきたもののうちの一つでしょう。そして、精巧な建築物以上に、これらの石像、短歌などには色濃く、当

時の人々の人間模様が刻まれているような気がします。歴史を作り上げてきた人達の悦びや悲しみがたくさん集まって、この明日香が存在するのだなと思いました。

5．おわりに

生徒の文章を読んでみると、多くの生徒が、思ったより山や川が小さい、と書いている。それまで『万葉集』の歌、その時代に、「雄大」「荘厳」「激動」といったようなイメージをもっていて、そのため意外な感じを覚えるのであろう。こうした感想は現地に行かなくては持てないものであり、この意外性を感じただけでも「古典旅行」の一つの目的は達せられたと言えよう。

しかし、私たちは、さらに「当時の人にとっての大きさとは」、さらに「当時の人にとっての山、川とは」といったことに思いを馳せてほしいと思う。

（R）まず最初に出会ったのが飛鳥川でした。イメージとは異なり、両岸はコンクリートで固められた、ごく普通の現代の川でした。でもその時に考えました。あれほど多くの歌を、このたいして大きくもない川のほとりで詠んだ、それがまぎれもない万葉の心なのだろう、と。川が雄大で素晴らしいから歌を作るという感覚はここではあてはまりません。山にしてもそうです。大和三山に代表される飛鳥地方の山々は特に高い山ではないと思います。畝傍、耳成、香具山。この三山があるべき所へあって、この地方をまるで取り囲むように立っているのを見ると何だか安心するのです。

そしてさらに、この経験がそれぞれの日常にフィードバックし、生徒自身の感性を伸ばしていくことになれば幸いである。

（S）最後に私達は再び甘樫丘に立った。二日間で見てきた場所の数々がその場所を詠った万葉人の心と結び付いて視界に入ってくる。明日香は小さな村。場所的なスケールは確かに小さかった。しかしそれが歌と結び付くと大きく見える。明日香を包み込むような万葉人の心に触れたいい旅行だった。